

---

# 魔法少女リリカルなのは PT事件の裏側

あああああ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは P T事件の裏側

### 【Nコード】

N9278L

### 【作者名】

あああああ

### 【あらすじ】

Project・FATEによって生み出されたのはフェイトだけではなかった。

生み出された少年は自分の運命とフェイトの未来をどうするのか。

P T事件の裏側に隠された管理局と少年の戦い。

「我、使命を受けし者なり」

とある世界のとある国の至って普通の街。

「契約の元……その力を解き放て」

そんな街に生まれた普通の少女。

「風は空に……星は天に」

彼女は運命か、偶然か……魔法という存在と今出会った。

「そして……不屈の心は」

これから起こる様々な物語、その序章の始まりの1ページ。

「この胸に！」

魔法により巡り会う少女達の運命……後にPT事件と呼ばれるこの運命は少女達の始まりの光。  
そしてここで語るのは彼女達の知らない運命の裏側、PT事件の闇の部分。  
それは一人の孤独な少年の物語。

## プロローグ（前書き）

初投稿なので色々ご了承ください。

## プロローグ

地球という世界で高町なのはと喋るフェレットが奇妙な邂逅をしているところ。

管理外世界103……名前すら無い砂漠の世界にある少年が立っていた。

その少年は黒いマントを羽織っており、その中は漆黒に蒼い線が何本か入っているような服を着ている。

そして何より目立つのがその手に持つ鎌、青白い刃は時折「バチッ」と音を立てていた。

「つくそ！……………デタラメすぎる！何なんだこのガキは！？」

「無人世界じゃなかったのかよ！？」

「今本局に増援を……………！」

増援を呼ぼうとした者は言葉を言い終わることはなかった。

男の仲間達は不思議に思い、男の方へと振り向くと、そこに男の顔は無かった。違う、正確には男の首から上だけが無かったのだ。首から血が吹き出ているその姿を見て仲間達は恐怖におののくが、それよりも先に出てくる疑問。「あいつの頭はどこにいったのか？」嫌な予感、しかしそれ以外はないという事実。仲間達は恐怖を胸に少年の方へと再び目を向けると少年がその手に持つ物を見て仲間達は武器を落とした。

「増援は困るんだよ……………全く」

少年が掴んでいるのは間違いなく仲間の頭だった。共に笑い、仕事をしてきた仲間の顔は苦痛に歪んだ表情をしながら息絶えた時の表情をそのままに写している。

それを何とも思っていないのか、少年は投げ捨てると武器を構える。対峙する男達はすでに戦意を失っていた。先ほど仲間が殺されるのを防ぐことはおろか、少年が動いたことすら気づけなかったのだ。武器を向けた瞬間殺される。背を見せた瞬間殺される。

「……………終了。今回は収穫なしか

武器を向ける、背を向ける……………それ以前に思考することすら少年は許さなかった。

20人はいたであろう男達は一瞬で首と体が別の存在になると脆くも乾いた地面に崩れ落ちた。

「後はこの死体の処理は……………」

死体の処理の仕方を考えていると砂漠の中から現れた巨大な生物を見て少年は思う。

（魔力に釣られたか？…………まあいい、こいつに処理してもらおうとするか）

少年の足元に現れる魔法陣、蒼い光を放つと共に少年の姿はもうそこには無かった。転移を使いこの世界から姿を消したことにより残ったのは死体と巨大な魔物のみ。

魔物は死体を全て丸呑みにすると再び砂の中へと静かに姿を消した。そこに残るのは少し削られた砂の大地だけ、そこに誰がいたか、何が起こったかを知る者はもういない。

青白い光に包まれた少年が現れたのは次元の狭間に浮かぶ庭園。



巨大な庭園の中を少年は迷うことなく進んでいくと、この庭園の主の待つ間へとたどり着いた。  
広い円上の間に出た少年はその中心まで歩み寄ると正面に構える女性に対して跪いた。

「ただいま戻りました」

「ご苦労、それで……例の物はどうした？アロン」

「はっ、こちらに」

少年……アロンは懷から小さな石のような物を取り出すと正面の女性……プレシア・テストロッサにそれを手渡した。

受け取った石を見て不敵な笑みを浮かべるプレシアを見てアロンは一つ尋ねる。

「プレシア様……フェイトとアルフの姿が見えないようですが」

「あの子達なら第97管理外世界にいるわ。そこでロストロギアを回収している」

「大丈夫でしょうか？魔法の存在しない世界とはいえ、二人だけに任せるというのは……」

「私だってあんなグズを使いたくはないわ。けどあなたには管理局の人間を全て片づけるという任務があるでしょう？  
それともあの子に管理局員を任せてあなたにジュエルシードを集めてもらうかしら？」

アロンは何も言わずに拳を握りしめている。爪が食い込むほどに握られた拳をアロンは振り上げようとはせずに、最後まで紳士に振る舞いその部屋を後にした。

その様子を見てプレシアは何も言わずに奥の研究室へと黙って消えていった。

## クロノとの邂逅（前書き）

小説……になってるのか？

## クロノとの邂逅

時空管理局の次元航行船アースラ。そのなかの一室、そこでは大きな机を様々な人間が取り囲んで席に着いている。

皆の視線の先にいるリンディ提督は軽い挨拶をするとゆっくりと口を開いた。

「ご存じの通り、第80から第130管理外世界での観察局員の失踪ですが……今のところ何の手がかりも見つかっておりません。先日第103世界に派遣されていた調査部隊の方々も連絡が途絶えた状態です。おそらくは観察局員同様に何かがあったと思われるかと」

「まさかあの精鋭部隊までもが帰還しないとなると……これは本格的に事件を調査するしかないか」

椅子に座った初老の男はため息をつきながらプロジェクターに映し出された局員達を見る。

そこに写っている局員の魔導師ランクは平均AAの猛者達、管理局の選りすぐりの者達を選んで今回の事件を解決するはずだった。

ただの失踪事件になんでこんな大がかりな人員導入を行うのか……そんなことをこの場にいる全員が最初考えていたが、今突きつけられている現実を見て皆は頭を抱えている。

「第103世界では大きな魔力は感知されていません。……………ですから、あの」

「どうしたんだハラOWN提督？しつかり伝えたまえ」

「はい……大きな魔力も結界も感知されていないことから見ると、相手は局員の方々に魔法を使わせる前に全て片づけたか、魔法を使えない状態にしたということしか考えられません。しかしあの世界には何かしらの装置のような物は見つからなかったので、おそらく前者の理由が正しいかと……………」

AAランク20人を難なく倒したということ。それを聞いて全員の背筋が凍り付いた。

この中にはAランク、AAランクの者。もしくはそのランクの人間と戦ったことのある人間がほとんどだ。

だからこそ恐怖した。AAランクになるための技量、力量、魔力。それを遙かに凌ぐ相手。おそらくオーバースランク級の何かが今回の敵となること。

目の当たりにしたことない相手にアースラの人間達は恐怖と不安しかその胸にはなかった。

「今回の件を受けて本局にさらなる増援を要請します。よろしいでしょうか？」

「ああ、かまわん。……こんな大事になるとは、私達も本局に戻って会議を開く。そこで増援の話を付けておこう」

立ち上がる面々にリンディは「よろしくお願いします」と頭を下げると本局へと帰る人達を見送った。

全員が部屋から出て行ったのを確認するとリンディは大きなため息をつきながら椅子へと座る。

ただの連続失踪事件と考えていたのが甘かったのか。自分の管轄で起きてしまったこの事件を振り返りリンディは再びため息をつく。失踪した痕跡、殺害されたならその痕跡。犯人がいたとしたらその目的、その力。何も分らない。

そんな状態で解決の糸口が見つかるはずもなく、リンディの口からはただただため息が漏れるだけだった。

「母さ……リンディ提督、会議の方はどうなりましたか？」

「母さんでいいわよ。今は誰もいないんだし。……そうねえ、お偉いさん方に事情を説明して増援の許可はもらったけど……」

あまり効果は期待できない。

口に出さずともリンディとその息子クロノはそう思っただけで再び頭を抱えた。

底知れぬ相手の力、そして力の痕跡すら残さないその周到さ。何より今だ犯人の顔すら分かっていないのだ。  
どうしようもない。ただその一言につきるだろう。

#

「くそつ、侵入者避けのトラップか！」

どことも知れぬ世界の誰も知らないであろう地下の遺跡。  
おそらく管理局の人間すらこの遺跡には入ったことがないのである。  
う。そのためか侵入者避けのトラップがそのまま残っていたのだ。  
襲いかかる魔力弾や降りかかる毒液を躲しながらアロンは顔をしか  
めていた。

（極力魔法を使うことは避けたい……しかしここまでトラップが多いとな）

そのトラップの多さに笑いが出そうになるが、そんな余裕は今はない。

身の危険を感じたのか、はたまたただ避けるのが面倒になったの  
は知らないが、アロンは一瞬でその場から消え去った。

そして彼が姿を現した場所は最深部の扉の前。その理由は至極簡単  
だ。ただ高速で罠が発動する前にここまでやってきたのだ。

「ここであつて……よな？」

若干の不安を覚えつつその扉を魔法で吹き飛ばすと、案の定上からギロチンのような刃物が落ちてきた。

深々と地面に刺さった刃をアロンは見下ろすとその刃を蹴飛ばして扉の奥へと進んだ。

そこに広がっていたのは広大な広間を囲むように作られた天まで届くような本棚。本棚にはぎっちり和本が収められておりその姿は圧巻の一言につきるだろう。

（この場所がプレシア様の求めていた知識の泉か………けどこの中からどうやってアルハザードの情報を見つければいんだ？）

ここにアロンがいる理由、それはこの世界にあるという知識の泉からアルハザードへの鍵を見つけてくるという任務だった。

そしてこの遺跡も見つけ、知識の泉と思われる場所にもたどり着いたはいが、その莫大な情報量を誇る知識の泉を前にアロンは思う。

どうしろと……？

しょうがない。片っ端からアルハザード関連の書物を漁るしかないか。

ため息混じりに本棚に近づいて適当な本を手にとった。



「寒冷地に適する農業？……………こんな物まであるのかよ。せめて戦闘に使える魔法みたいなのは置いてねえのか？」

ため息と同時に本を閉じて愚痴を言いながら上を見上げるアロンだったが、そこで何かに気付く。

遙か上、そこに何かが飛んでいたのだ。自分以外にこの場所にたどり着いた者がいる？いや、あり得ない。

では住み着いている魔物だろうか…………餌がないこんな場所に住み着くなんて無理だろう。

ではあれは……………？

警戒の構えを取りながらアロンは上を静かに睨みつけるとこちらに飛んでくる何かを見定めた。

そしてその正体が分かった瞬間にアロンは呆気にとられてしまう。

飛んできた物、それは本だったのだ。

自分の前にふわふわと漂う本を見て「ああ、なるほど」と呟く。

どうやらこの巨大な書庫は探したい情報のワードを口にすればそれが検出されるシステムになっていているらしい。

そういえばアロンも聞いたことがある。管理局には古代の技術を使った無限書庫なる場所が存在すると。その元となったのがおそらくこの知識の泉なのだろう。

「ホコリをかぶってはいるけど本は傷んでない……まさかこの本全部に魔法がかかっているのか？」

表紙にかかっているほこりを吹いて本を開くと、そこには新品と見まごうほど鮮やかな文字が残っていた。

そして開かれたページに書かれていたのは射撃系魔法の構築の仕方というページであった。そこに書かれていた一文を見てアロンはふと疑問を抱く。

「……大気中の魔力を取り込み……って、なんだ？」

気になる文章ではあるけど今はいい。任務の方が大切だ。

割り切ったアロンは本を一端近くにあった机の上に置くと上の方を向いて呟く。

「……………アルハザード」

呟かれたただ一言の言葉に数十、数百という本が反応して広間の吹き抜けに本の渦を作る。それを見てアロンは驚き半分に呆れながら思ったことを口にする。

「とりあえず整理して机の上に置いてくれ」

本の渦はいくつかの塊に分かれると机の上に静かに着地してくる。  
まさか本当に言うことを聞くとは……………。

古代の技術に関心しながらもアロンは近くにあった椅子を引いて手元にあつた本をゆっくりと開いた。

#

「本当ですか!？」

次元航行船アースラに響く少年の驚きの声。船の全てを司る制御室にはクロノの他に増援として派遣されてきた局員達が整列してリンディの話を聞いている。

リンディはクルーのエイミィに指示すると、メインモニターに映像が流れ始めた。

「先ほど第154管理外世界に放っていた魔力探査装置に反応がありました。そして局員を一人向かわせた結果一人の人間を発見。彼は何処かへと消えてしまいましたが転移の魔力は感知されてはいません。おそらくはまだこの世界にいるのでしょう」

リンディは未だに失踪が起こってない世界に高性能の転移魔力を察知する装置を設けていた。

正直犯人の目的すら分からなかったため、期待はそれほどしてなかったがまさかこんなに早く結果が出るとは……………。

自分としても少し驚きだが、今はそれどころではない。今はその犯人と思われる人物がいる世界へと行くのが何よりも先決だ。

「リンディ提督！僕もその世界に行きます！」

「だめよ。あなたは執務官よ？ここは派遣されてきた局員の方々に任せましょう」

「しかし今は一人でも戦力が必要です！足手まといになると思ったらすぐに帰還します！だからお願いします！」

まいった……………。

クロノの正義感、行き過ぎとまでとれるその強さは昔から知っていたが今回ばかりは危険すぎる。

母として、この子の命を預かる上司としてもここは許可は出来ないが、この子のことだ。

おそらくダメと言っても無断でついて行くのだろう。ならば……………。

「分かったわ。でもあなたの任務は戦闘ではなく情報収集。専用はこの人達に任せてあなたは敵の情報を一つでも多く持ち帰ること。いいわね？」

「はっ！了解しました！」

威勢のいい返事をした後にクロノは大人の局員達に混じって第154管理外世界へと飛び去っていった。

無事に到着したクロノ達は派遣魔導師のリーダーであろう男の指示により分散して目標の人物を捜し始めた。

モニターに映るその姿をみてリンディは我が子の成長を喜びつつも不安を覚える。この不安は親バカとかそんなものではない、何かもつと……………危機が迫るような。

#

知識の泉の中央に置かれた大きな机、そこに高々と築かれていた本の塔はいつの間にか小山程度に縮んでおり、読まれた本は隣の机へと移動して綺麗に区分されていた。

椅子をロッキングチェアのように傾けながら本を読むアロンの速度は尋常ではない。本のページを読むではなく『目に映る』程度で次のページへと移動してゆく。

その速度は0.5秒程度で次々とページを捲ってゆく。それなのに

本人は大して疲れた様子もなく、ただ黙々と泉の知識を飲み干していった。

「ふう……………大体こんなもんか」

机に残った最後の本を読み終えたアロンはボタンと本を勢いよくと閉じて隣の机に行くように命令する。椅子から立ち上がると流石に体の方は疲れていたのか、伸びをした途端に体のいたるところから音がなる。

首を回しながら本が綺麗に分類されている隣の机へと移動して改めて本達を見下ろしてみる。

アルハザードの伝説にその技術と呼ばれる物を集めた書物、はたまたアルハザードに行くために行われた実験の報告書なんてのもあった。

（けど結局アルハザードへの道は見つからなかった……………分かったのはクリテリアのことぐらいか）

書物のいたるところで出てきたクリテリアという単語。文章から察するにアルハザードが滅んだ後に繁栄した世界の名前で、次元移動や質量武器や魔法も使われていたかなり高度な文明であることが分かった。

そしてこのクリテリアもアルハザードの知識を欲して様々な実験を繰り返したが全て失敗に終わり、結局クリテリアは戦争により滅んだというのがアロンがついでに読んだ歴史書の内容だった。

そして知識の泉は戦火からこのクリテリアの築いてきた物を残すた

めに当時の科学者などが集まってこの無人の異世界に全てを保管したらしい。

「とりあえず参考になりそうな本だけ持って帰るか」

データは全て取ってあるが原本を見せるに超したことはない。そう思いアロンは5冊ほどの本を持って吹き飛ばした扉を踏み越えようとしたが。

「うおっ!？」

部屋を出た瞬間、変な音がするのに気付きアロンは手に持つ本へと目を向けると、そこには今にも風化してボロボロと崩れ落ちてしまっているような本があった。

先ほどまでは新品同様、そんな本がなぜいきなりこんな状態に？疑問は尽きないがとりあえず中に残してきた本がどうなったかを知るために知識の泉の中へと戻ると、手に持つ本の風化は止まっていた。さっきのは幻だったのではないかと思うぐらいに今では何ともないふと思った答えを確かめるためにアロンは本を持って再び扉の外へと向かう。

「ああ……やっぱりか」

扉を出た瞬間に本が急激な風化を始める。そして中へと戻ると本は

姿を取り戻す。

おそらくこの知識の泉は何かの結果によって本の劣化を防いでいて、そのためこの場所を離れると本に今まで劣化するはずだった分が一気にやってくるということだ。

そんな魔法は聞いたことがない。そう呟きたいが、この場所には知らない魔法なんてごろごろ眠っているのだろう。

また今度来よう。そう思いながらアロンは本達に棚に戻るように命令すると知識の泉を後にした。

#

遺跡を出た瞬間にアロンが感じた魔力。この世界に散らばってはいるが、おそらく30ほど強い魔力を感じる。

何故気付かなかったのかは十中八九この遺跡に理由があるのだろうが、今は調べる必要もない。

（別に戦闘はいいがこの場所を管理局に見つかるのは好ましくないな……………よし）

気付かれないように未だ魔力を抑えたままにアロンは草一つ無いあれた大地を走り始めた。

プロジェクトFによって生み出されたアロンの身体能力は人間の比ではない。普通の人間が高速で空を飛ぶのと同等の速度で岩を超えてゆくアロンは体で風を切りながら20分ほど走り続けた。



こちら辺でいいか。そう思ったアロンは呼吸を整えると大きく息を吸って吐くと共に抑えていた魔力を放出した。

#

空からゴツゴツとした荒れた大地を見下ろして飛び続けるクロノは苛立っていた。

未だに局員達からターゲットが見つかったとの報告は来ていない。これだけ何も無い世界だ。何かするならそれなりの魔力を使う他ない。

もしくはターゲットの隠れ家がありそこに今はいるのだろうか？しかしそんな建物らしきものは見つかつてはおらず、第一それならこんな跡をつけられるような真似をするはずがない。

では一体……………。

「っ！？これは……………！？」

突如後ろから感じた巨大な魔力。今まで魔力の気配すらなかったのに、突如として現れた気圧されるほどの魔力。

それを背中に受けたクロノは背筋が凍り、冷や汗が止まらない。止まっただけが後ろに振り向けない。ここから近い場所ということでもない、しかしクロノは振り向くことが出来なかった。

「くそっ！くそっ！僕はこんなじゃない！」

震える足を殴りつけて唇を噛むクロノは覚悟を決めたのか、後ろを振り向きがむしゃらに巨大な魔力の方へと飛んで行った。

#

「おお……思ったより多いか？」

40ぐらいいるか？なんて上を見上げながら呟くが、上にいるのは管理局の局員達だ。それに対してアロンは呟いてるのだから呑気というほかない。

しばらくして一人の髭を生やした男が地面へと降りてきて何も言わないままにアロンに杖を向ける。

「我々は時空管理局の者だ。貴様は一体何者だ？」

有無を言わさぬこの態度……仕事とは言えこれは無礼じゃないのか。

「大の大人が子供に対して武器を向けて威嚇ですか？」

「確かに見た目は10歳程度の子供だが、ではなぜそんな子供がこんな無人世界にいるのだ？」

「それは確かにな……流石に無理がある言い訳だったか」

もうちょっとマシな言い訳を考えるとかないとな……片づけた後で。

「こいつがターゲットだ！やれ！！」

髭の男の指示で空に止まっていた局員達から一斉に砲撃魔法が飛んできた。周辺の地面すら抉るような砲撃の雨を間一髪で躲した髭の男は空に戻ると局員達をまとめて隊形を組む。

乾いた地面の土と砂が舞い、アロンがいた周辺が砂埃に包まれていて生存の有無が確認できない。全員が息を吞んで敵のいる場所を見つめる中、突如後ろで悲鳴が鳴った。

「ぎゃあああああ！！！！」

「な、なんだ！？」

「隊長！あれを！！」

悲鳴に振り向く隊長と呼ばれた髭の男は一人の局員の声で上へと視線を向けた。

「まだこっちは武器も出してなかったのにさ。ひでえよなあ……ホント」

上にいたのはアロン。その肩には少年の体には似つかわしくない大鎌が背負われており、その姿だけでも十分異形だったが、なにより局員達の目を引く物がそこにはあった。

「た……たいちよ……う……助け……」

背負われた大鎌の刃は天へと向けられており、その刃は一人の局員の腹部を貫通していた。

大鎌の根本には血が滴り、乾いた地面を紅に濡らしてゆく。だらんと投げ出された四肢は抵抗する力すらもう無いのか、動くことすらない。

「ほら助けてやんなよ。隊長さんよ」

大鎌を隊長へと向けると隊長は恐怖でたじろいってしまった。そんな様子を見てアロンはクスクスと笑いながら相手がどう出るか楽しみ

にしていたが、ここでもわぬ乱入者が現れた。

「な、なんなんですかこれは!？」

なんだこのガキ……?と思われているのは息を切らしてこちらを見ているクロノ。

「貴様が失踪事件の犯人だな!？貴様を逮捕する!」

絵に描いたような正義の味方の台詞だな。また笑えてきた。

アロンは片手で口元を押さえてつり上がる口元を隠しながら大鎌を振るった。刃に貫かれていた局員はその勢いで隊長の下まで飛ばされると、そのまま息絶えた。

あまりに非道、あまりに外道、あまりに残虐な少年は死体を見てクスクスと笑いを上げるのみ。

本来なら仲間を殺されて殺意を覚えるだろう。犯罪を前にして怒りが沸き上がるだろう。しかしどうだ。

この少年を前にして我々は何を抱いている?答えは簡単だ。恐怖……ただそれだけだった。

局員達はこの少年が怖くてたまらなかった。巨大な魔物、無差別殺人を行う魔導師、犯罪組織。

様々な物を目にしてきた局員でさえアロンのことが怖くて仕方がなかったのだ。

このあまりに無垢に笑う少年の笑顔が。

「で？俺をどうするの？」

その問いで我に戻った局員達は隊長の指示により散開してアロンのことを取り囲むと再び砲撃魔法の集中砲火を行った。

上、下、左右……全方向からの攻撃を繰り返してみるが、その結果は薄々分かっていった。

「また同じことかよ。芸がないなあホントに。まあいいさ……次はこっちの番だ」

集中砲火の中心にいたはずのアロンはいつの間にか隊長の後ろへと移動していた。

一体いつ？攻撃が始まる前にはいなかったのか？それとも攻撃を防いだ後に移動してきたのか？分からない。それすら分からない。

隊長は咄嗟に防壁を張るが、その頃にはアロンはその場にいなかった。

「ぎゃあああああ……！」

「あ、足がああああ!!」

聞き慣れた部下の声、しかしその声は悲痛な叫びになって隊長の耳に届いた。恐る恐るそちらへと目を向けると両手を落とされた者と両足を切り落とされた者がいた。

その姿に隊長が目を見開いたその瞬間、今度はその局員の体が半分に切り落とされた。

「あ、ああ……………そんな……………」

無残にも崩れ落ちた仲間の体は今はただの肉塊となって地面へと落下してゆく。そんな様子を見たクロノに強烈な吐き気が襲う。

思わず下を向いてしまったクロノの耳に入る次々と討ち取られてゆく局員達の悲鳴。

顔を上げるのが怖い。

逃げ出したい。

そんな思いとは裏腹に『戦え！前を向け！』という自分が心の中にいて、葛藤が収まらない。

「何してんだ？」

突然かけられた声にクロノは口を押さえながらゆっくりと顔を上げると、そこには自分と同じ年ぐらいの少年が頬に返り血を浴びながら首を傾げていた。

ああ、そうか……ようやく分かった。

この子は殺すのが楽しいんじゃない。ただ普通なんだ。ただ普通に、朝起きて夜に寝るように、この少年にとって人を殺すのはそれぐらいの価値しかない。だから恐ろしかった。

殺人に快楽を覚える者や魔物は明らかな殺意を持っている。けど目の前にいる少年はどうだ？ 殺気はおるか敵意すらもっていない。それが逆に不気味であり恐怖だった。

「ちくしょおおおおー！ くらいやがれええええええー！」

アロンの後ろ、いつの間にかそこには杖を構えた隊長がおり、杖の先には大量の魔力が集まっていた。放たれる赤い砲撃、それは一直線にアロンへと向かうが、アロンの後ろには未だ動けないクロノがいた。

まずい

そう思いながらも体が言うことをきいてくれない。完全に直撃コースをたどる砲撃を見てクロノはここまでかと諦めをつけるが、その諦めを打ち砕く者がいた。



アロンは大鎌を下から上に切り上げる。  
片手で振り上げられた大鎌は隊長の砲撃を切り裂き、その砲撃は二つに分かれて遙か彼方へと消えていった。

「仲間ごと狙ったのかよ……チツ、胸くそ悪い」

大鎌を肩に担ぎながら隊長を睨みつけるアロンを前に隊長は腰が抜けてもう杖を構えることが出来なかった。  
あれは自分の最強の魔法。自分の今までの経験、血の滲むような努力、隊長としての誇り、それを今全て切り裂かれた。

一瞬で自分の前に移動してきたアロンを前にもう声も出ない。頭の中を駆け巡るのは『殺される！』という危険信号のみ。  
しかしアロンはここで以外な行動に出た。

「なああんだ。あんたの雇い主……差し向けた人物は誰だ？」

武器をしまったアロンは隊長を見下ろしながらそんなことを口にす。それを聞いて少しは平静を取り戻せたのか、隊長は恐る恐る口を開いた。

「し、知らない……差し向けたなんて……」

「この間から観察世界に派遣される局員が以上に多いんだよ。俺が騒動を起こす前から。そして俺を見つけるや否や襲ってきた。あの時のも一応強い魔導師みたいだったけど、じゃあなんでそんな強い魔導師がこんな何もない観察世界にいる？誰がここに差し向けた？」

脅迫……………なのだろうか？

アロンはふと頭に浮かんだ疑問を口にするような態度だが、それに対して隊長は顔を青くして全身が震えている。

「本当に知らないんだ……………私達はただ命令に従っただけ……………」

嘘はついてない。本当にこの男は上からの命令に従ってここに来ただけ、目的はおそらく失踪事件の犯人の逮捕。

つまりこの男の目的はアロンだったわけだ。ではアロンの言う最初に管理外世界に現れてアロンに襲いかかったのは誰だ？

「はあ……………考えても無駄か。もういいよ、そんじゃ」

アロンはため息混じりに手に持つ大鎌を重力に任せて振り下ろした。その瞬間悲鳴のような物が聞こえたがアロンはそれを聞き流してクロノの方へと目を向ける。

そこにはさっきまで威勢のいいことを言っていた少年ではなく、顔面蒼白で震えている少年がいた。

「お前は何か……って、知るわけないか。もういいよ、面倒だから帰れ。それに、どうせ今のことは記録されてるんだろ？口封じする意味もない」

アロンはクロノの遙か後方の空を見上げて不敵な笑みを浮かべた。しかしクロノはそれどころではない、というか何も聞こえてはいなかった。何を言っても無駄か……。アロンはクロノをそのままに転移の魔法を唱える。

「それじゃあな」

そう一言だけ残すとアロンはその世界から姿を消した。

#

戦艦アースラの中でリンディは送られてきた映像を今一度見直している。

「お前は何か……って、知るわけないか。もういいよ、面倒だから

帰れ。それに、どうせ今のことは記録されてるんだろ？口封じする意味もない」

そう言つて少年は記録用オートスフィアに向かつて笑いかけた。数キロ先からばれないように細心の注意を払つて記録していたつもりだつた。

そこに慢心はなかった。なのに少年は笑いかけたのだ。リンディはそこで映像を切るとコンソールを叩いて報告書を作り始める。

「これ以上の増援はいくらなんでも望めないし……かと言ってほつとくわけにもいかないし……」

完全に手詰まりだ。せめて相手の目的が何なのか、それを知ることが出来れば。

そうだ、そういえば……

リンディは再び映像をつけて食い入るように見る。

「この間から観察世界に派遣される局員が以上に多いんだよ。俺が騒動を起こす前からな。そして俺を見つけるや否や襲つてきた。

あの時のも一応強い魔導師みたいだったけど、じゃあなんでそんな強い魔導師がこんな何もない観察世界にいる？誰がここに差し向けた？」

それに対して今回の増援部隊の隊長は知らないと言つていた。だが

しかしどうだろう。

これは少年が言うようにかなり不可解なことではないだろうか？

観察世界というのは元来何も無い世界のことだ。文明もない。ゆえに遺跡などの文化遺産もない。まだかつて文明があつたのなら遺跡探査のチームが送り込まれる。

しかしこの近くの世界は既に調べられていることが判明しているが、そんな世界になぜ少年が強いと口にするほどの魔導師達が送り込まれたのだろう。

「うーん……そうだ、確かこの派遣部隊を送り込んできたのって……」

PCの中にあつたはずの資料、その中に確か名前が……………。

「あつた……ベニツク・アグワルド中将」

思い出した。事件が大きくなり始めた時にこの事件の全権を持った人だ。

早いうちから行動を開始してとても助かつてはいたが、今改めて考えてみると何故こんなお偉いさんがこんな事件を？

リンディの疑問は最もだ。ベニツクは魔力こそ無いものの、優れた指揮や統率のとれた部隊を率いていくつも事件を解決してきた人間だ。

その後は部隊を率いることは無くなったが、中将としての責務に生

きる姿は上司の鏡と呼ばれていた。

そんな彼がこの事件を担当するのはおかしいか？いや、それは違う。早すぎるのだ。

彼が担当になったのは確か失踪事件が起きてリンディ達が調査を始めてすぐの頃、その時リンディはかなり驚いたのを今でも覚えている。

その時も少しは疑問を持ったがあまり深くは考えないようにしていた。しかし今思うとどうだろう。

連続失踪事件、確かにこれは異常なことだが、観察世界なら魔物に襲われたり過酷な環境に耐えかねて逃げる局員も少なからずいるのは確かだ。

当初リンディもこれは逃げ出したのではないかと言う線で事件を捜査していたが、ここでベニツクの登場である。

彼はA Aランク魔導師達を派遣して捜査に協力してきたのだ。

素早い対応、迅速な処理。しかし何故彼はこの事件を知っているのか？

リンディがこの事件を捜査するように頼まれたのは本局の三佐だ。つまりそれぐらいの地位の人間でも十分処理できると思われるということ。

それがなぜ中将という人間までが出てきたのだろうか。

「……………考えすぎ、で終わればいいんだけど」

その呟きを聞く者は誰もいない。しかし物語は呟きを現実に変えてゆく。

## 二人の関係（前書き）

この何書けばいいんだろ……この前書きって

## 二人の関係

知識の泉にてアルハザードの情報を集めたアロンは少々の騒ぎがあったものの、無事にプレシアの庭園に到着した。廊下を進み行くとだんだん何かの音が聞こえてくる。それは少女の悲鳴のような、そんな悲痛な声。

「くそっ、またか！」

アロンは急いで主人の間へと向かうと、そこには耳を塞いでうずくまっている者がいた。

「……………アルフ」

「アロン！フェイトを、フェイトを助けとくれよ！」

必死の表情で懇願するアルフの姿はフェイトの声と同じぐらい痛々しく、アロンは膝立ちで懇願するアルフの頭を撫でると主人の間へと足を踏み入れた。

そこに広がっているのは何度見ても慣れない光景、自分と同年代の少女が宙づりになり鞭で打たれるという虐待……いや拷問と言った



ほうが正しいだろう。

「失礼します。任務を完了し戻ってきました」

「ご苦労……首尾は？」

「古代クリテリアのアルハザードに関する知識、転移についての技術、医療についての技術を」

「上出来ね、さあ……こちらに」

アロンは右手の人差し指にはめていた指輪を外すとプレシアに渡す。それを受け取ったプレシアは不敵な笑みを浮かべながらアロンを見下ろす。

「あなたは優秀ね。期待通り、もしくはそれ以上の結果をいつも持つてきてくれるわ。……………それに比べて」

プレシアが睨む先は弱り果てたフェイト。フェイトはその視線に怯えながらも目を反らすことはしなかった。

怯えながらも母親と真っ直ぐに向き合おうとする目、しかしその目はプレシアには届かなかったのか、プレシアは目を背けて再びアロンを見下ろす。

「あの子はダメね。この大魔導師プレシア・テストロッサの一人娘だというのに」

「お言葉ですが、ジュエルシードは様々な物に取り憑き暴れ回ると聞いています。例えそれが普通の物であれロストロギアが取り憑けばかなりの驚異となり得る。

それに管理局にはならないように集めると言ったのはプレシア様ではないですか？」

「ばれないようにしろとは言ったけど、そのために時間をかけるとは言っていないわ。私には時間がないのよ」

「分かっております。しかし焦りは何も生みません、違いますか？」

「……………ふん、言うようになったものね。まあいいわ、アロン。フェイトの後片付けをしておきなさい。その後は命令あるまで待機、いいわね？」

アロンと怒気を含んだ視線とプレシアのそれを蔑むような視線。少しだけにらみ合った二人は先にプレシアが興味なさげに目を反らすとその足で奥の研究室へと消えていった。

その後ろ姿を見送ったアロンはプレシアが消えたことで地面に横たわるフェイトを抱きかかえると主人の間を後にした。

そして途中でアルフを拾い、アロンが向かったのはアロンの部屋。そこには猫が一匹おり、アロンに気付くとニヤーと一声鳴いて答える。

「おいフォニス、そんな冗談はいいからさっさと元の姿に戻れ」

「分かっております。さあ、フェイト様をベッドに」

アロンが猫に話しかけると、猫は光を帯びながら猫から人間へと変身を遂げた。その姿はおっとりとした表情を浮かべた腰まである茶髪の女性、そして頭には猫の耳が付いておりたまにピコピコと動いている。加えて言えば何故か和服。

たれ目を持つフォニスはベッドに寝かされたフェイトの顔を髪を掻き上げながらのぞき込む、そして右の目元には泣きぼくろがあり、知ってか知らずかその姿は妖美なものだった。

「大丈夫、気絶してるだけです。回復魔法さえ唱えておけばじきに目を覚ましますよ」

「ホントかいフォニス姉さん！……よかった」

心底ホッとしたようにため息をつくアルフを余所にアロンとフォニスはフェイトに手をかざす。

そしてその手から光りが溢れ始める。光に包まれたフェイトの体は

先ほどまで鞭の跡や傷で一杯だったのが嘘のように傷が消えていった。

「ん……………っう……………」

「まだ起き上がるな。もう少し寝てろ」

「……………っん」

フェイトに優しく諭すアロンは笑みを向けながら治療を続ける。そしてフェイトもその笑みに安心したのか安らかな笑みを浮かべて静かに目を閉じた。

それから30分ほどたっただろうか、傷が治ったのに加えて跡一つ残さないようにしていたらこんなにも時間がかかってしまった。完全に傷が消え、体力も回復したフェイトはベッドから起き上がるとアロン達に笑みを浮かべる。

「ありがとう兄さん、フォニス、アルフ」

「気にすんじゃないよフェイト!」

「当然のことをしたまでですよお嬢様」

「……………」

頬を掻きながら照れるアルフと柔らかな笑みを返すフォニス。しかしアロンの豊穣は固く、目を反らしている。

「……………兄さん？」

「……………俺は……………お前の兄さんじゃないよ」

それだけを言い残すとアロンは部屋を後にした。その態度にアルフは少しばかり愚痴を漏らす。その傍らでフェイトは顔を落としている。そんな様子を見たフォニスはフェイトの頭を優しく撫でながらベッドの端に座る。

「主はお嬢様のことが嫌いなわけではありません。ただ恥ずかしいんですよ。ですからフェイトお嬢様は何も悪くはないんですよ」

「でも、でも兄さん……………アロンをまた怒らせちゃった……………」

「あれは怒っているわけではありません、いつもあれは照れ隠しですよ。お嬢様は主にお兄さんになって欲しいんですね？」

「うん。けど……」

「ならいくらでも兄さんと呼んであげて下さい。今のような態度を取られても何度でも。そうすれば主もそれを認めてくれますよ。頑張ってくださいお嬢様」

フォニスの助言に目を少しばかり輝かせたフェイトはフォニスに向けて満面の笑みを浮かべて「うん！」と頷いた。それを見てフォニスも微笑み返して再びフェイトの頭を撫でた。

時の庭園の外、うねり続ける高次元空間を見上げながらアロンは一人考え事をしていた。自分はフェイトの兄になった方がいいのか？とフェイトは母親の他に心の支えを欲している。そして母親はあの通り、自分としてもフェイトを絶対に不幸にはしたくない。しかし…

……

「まあ……無理だよなあ……」

この問答を今まで何回行っただろう。フェイトに「兄さん」と呼ばれるたびにこの問答をしている気がする。でも答えはいつも一緒だ。

「ここにいらしたんですか主」

「フォニス……フェイトの様子は？」

「怪我も治りましたので今はお嬢様の自室にて眠られています。…  
…というより自分で確認なさったらどうですか？」

「馬鹿言つなよ」

そこでアロンはフォニスからプイツと顔を背けてしまう。その姿がどうにも子供っぽかったためフォニスは思わず笑ってしまう。こういった時のアロンは大概無口になる。というより完全無視の状態になる。

「すみません。主の態度がいつもとは想像できないくらい子供っぽかったもので」

「……………」

「怒らないで下さいよ。悪気があったわけではないんですし」

「……………」

「完全無視ですか。まあいつものことですけどね。……そうだ、主に聞きたいことがあるのですが」

「……………」

「なぜお嬢様の兄になってあげないのですか？」

顔を背けていたアロンの肩がぴくりと揺れる。それを見たフォニスはさらに話を続ける。

「主の考えも分かります。ですがそろそろ自分を認めてもよろしいのではないですか？……お嬢様も喜びます。お嬢様の支えになれるのは主だけののですよ？」

「無理だつての。お前の甘言にはのらねえよ。人を支えることが出来るのは人だけだよ」

「それではアルフはどうなるのです？」



「見た目や種族の意味じゃない、中身が人間ならいいんだ。だが悲しいことに俺はそれすら当てはまらないんだよ。お前も分かっているだろ」

アロンの目には興味がないと言った色が映っている。もはやこれ以上のアプローチは無駄か。

「主の覚悟がそこまで固いというなら私は何も言いませんよ。ですが、それで悲しむのはお嬢様だということはお忘れなく」

主を一人残してこの場を後にするフォニスの肩は落胆から少し下がっている。しかしアロンはどうだろう。

腕に力が入り肩が震える。ギリギリと音を立てていた手を力なくほどくと今度は上を見上げた。

「分かってんだよ……お節介野郎」

上を見上げるアロンの目に映っているのは落胆、諦め、それとも絶望だろうか。美しい海のような蒼眼は今は深海を映したかのように暗く濁っていた。

## アロンの選択

どこかの異世界、そのどこかの建物、そのどこかにアロンはいた。

「せ、狭つ……………一番安全って理由だけで選ぶもんじゃないな。  
くそ、全然進まねえ」

第50世界、ルナルタ。ここはミッドチルダからこれより先の管理外世界に行くときに寄るための港のような場所もあり、そんな港町にはかなりの数の市民が住んでいる。

そんな町の中心部、そこには大きな建物が建っており、そこは管理局支部と呼ばれ近辺の管理外世界の情報を取り纏めている場所だ。そんな建物の側面にある小さな穴、吸気口にアロンはいた。

「計算だとギリギリ行けるって……ホントにギリギリだな」

吸気口を少し広げさせてもらったが、それはばれないように工作しておいて、今アロンはダクトの中を進んでいる。

さながらスパイのようだがまさに今回の任務はその通りだ。話は前日になる。

プレシアに呼び出されたアロンは主人の間に行くと一つの物を投げ渡された。

それは一枚のディスク。題名も何もないそのディスクとプレシアの顔を交互に見ていると。

「それは本局のコンピュータにハッキング出来るソフトよ。それを使って本局からあるデータを持ち去ってきなさい」

「このようなソフトがあるならばプレシア様だけでも出来るのでは……………?」

「管理局のコンピュータは独自の回線で情報をやりとりしているのよ。時間をかければそちらから侵入することも可能だけど、今は時間がないわ。」

だからあなたには本局のコンピュータに直接アクセスしてそのソフトを入れてちょうだい」

そして時の庭園から一番近い本局のコンピュータがある世界。それがこころナルタ。

正面突破もいいが、それで情報の漏洩を防ぐためにコンピュータが全面アクセス不可なんてなったら元も子もない。ゆえにアロンはこのようなスパイ的行動をしているのだ。

「まさか子供が地上30m地点の吸気口から入ってくるとは思わなかったのか。かなり狭いけどコンピュータルームまでは直通で行け

るな」

建物の設計図はプレシアからあらかじめ渡されてある。そんな物とここで手に入れたのは謎だがその設計図から立てた侵入経路は至って簡単だ。

管理局支部の上空200mからパラシュート無しのスカイダイビングだ。そして着地した後は壁を伝って吸気口へと侵入する。

この建物の警備が手薄なわけではない。ただ近づく、もしくは侵入するとなれば絶対に魔法を使わなければならないため、四方に魔力感知センサーを配置していた。

たしかにこれなら魔導師が近づいてきたならすぐに分かる。しかし今回の侵入者は規格外過ぎた。魔力感知センサーの範囲外の上空200mから落ちてきて魔法無しに無傷なのだから。

建物の外面には強力なセンサーがあつたけど中には無いか、不用心だねえ。

そんなことを考えながらアロンが行き着いた先にはダクトの下から光が差していた。その上まで来たアロンは下をのぞき込むとそこにはコンピュータが沢山並んだ部屋があつた。

アロンは静かに吸気口の部分を破壊すると下に降りて一台のコンピュータの前に座る。すぐさま起動しディスクを挿入する。

いつ人が来てもおかしくない。そこで殺すなり気絶させるなりするのは容易だが出来ることなら見つかりたくはない。

解析完了

「さて、こう打ち込めば出るとは言ってたけど……………ん？これか」

現れたウィンドウにプレシアから教えられていたコマンドを入力するとあるページが表示された。間違いない、このページだ。

「第70～150管理世界で下記のロストログアを回収すること……こいつか、やたら局員を送り込んできてる奴は。えっと名前はベニツク・アグワルド中将か」

そこに書かれていたのはベニツクの今までの功績などに加えて明らかに秘密情報のような物まで出てくる。それらを一通りコピーしてデータを指輪へと転送しているとき、アロンはある情報を見つける。

それはジュエルシード発掘への資金援助に関する内容だった。

「これ俺が奪うはずだったんだよなあ、でもその前に暴走してどっかに飛んでくって……………このベニツクって奴も結構災難なんだな」

本当ならアロンはジュエルシードを奪うために画面に出ている世界へ行って強奪してくるはずだったが、出発する直前でプレシアからストップの声がかかった。

何事かと聞いてみると、「ジュエルシードが紛失したらしい」とだけ言って怒っていたのを思い出す。

すこしだけ思い出に苦笑いを浮かべていると画面に『完了』の文字。素早くディスクを抜き出すとアロンはコンピュータの電源を落として引き上げようとしたその時。

「あれ？君こんなところで何してるんだい？」

突然開かれた扉、そこから顔を出す男。男はこちらを不思議そうに見ながら近づいてくる。

やばい……どうしよう。気絶させるか？

どうしようかとオロオロしていると男はアロンの前にしゃがみ込んで笑みを浮かべた。

「ダメだよこんなところに入っちゃ。見学コースはあっちだよ」

……あー、そういうこと。

アロンはこの街に入るためにいつもの黒服ではなく子供らしいＴシャツとハーフパンツにした。その方が街では動き易いと考えたからだ。

そしてこの男の言動から推測するにアロンはただの迷子の子だと思われるらしい。アロンとしては複雑だが、都合のいいのには変

わない。

「ごめんなさい……トイレどこか分からなくて」

「ははっ、怒ってるわけじゃないさ。さあ、ついておいで。トイレはこっちだよ」

そう言って手を握られるアロン。上機嫌でアロンを案内する男とは対照的にアロンは心底疲れた様子だった。これなら始めから迷子として入ればよかったんじゃないか？

そう考えつつアロンは引かれるがままにトイレに寄った後に正面玄関から男に見送られて出て行った。

「ありがとうお兄ちゃん！」

「おう！気をつけて帰るんだぞ！」

しばらく歩いて管理局支部が見えなくなるとアロンは大きなため息をついた。

「はあ………疲れた。これなら魔獣相手にしてる方がよっぽど気楽だ」

その言葉を残してアロンはこのルナルタを静かに去っていった。

戻ってきたアロンはまずプレシアに任務の報告と目的のデータの提出。「ご苦労」その一言で背を向けたプレシアにアロンは「一ついいですか？」と声をかける。

「今回のデータ、ベニツクという男がジュエルシードを狙っているのは分かりましたが、その理由は？」

「さあ、知らないわ。私が興味あるのは私の邪魔をしようとしてる人間の情報だけですもの。その人間の目的なんて知ったことではないわ。」

「分かりました。では失礼します」

そう言ってプレシアに背を向けて去ろうとしたアロンの目にある物が映る。下を向いた時に見えた床の赤いしみ。しかもそれは真新しい。



まさか……………！

アロンは自室へ走り出す。おそらくこの事情を知っているであろう  
フォニスの元へ。

「フォニス！フェイトはどうした！？」

「お嬢様なら地球に戻りましたが？」

「いつだ！？」

「昨日です。主は5日もいなかったので知らせることが出来ませんでした」

「そうか……………なあ、あいつ……………」

「はい、お察しの通り。いつものように」

それを聞いたアロンは力なくベッドに座り込むと頭を抱えて大きなため息をついた。その姿をみてフォニスも静かにその横に腰を下ろす。

「分かっていても止められませんでしたよ。プレシア様も、お嬢様も」

「……だろうな。あいつの怪我、今回は……」

「いつもよりひどかったです。しかも最近では虐待の頻度も上がってきてます。……主、これ以上は………」

そこでアロンは何か考える素振りをするとゆっくりと立ち上がりフォニスに一言だけ告げる。

「……………フォニス、ここを出る準備をしておけ」

「了解しました。主」

もうあいつが傷つくのをただ見るだけなんてのはごめんだ。

けどあいつがまだ母を愛しているというなら、俺は俺のやり方で無理矢理にでもフェイトを救ってみせる。

「それでは、どこに行くのですか?」

「地球だ。行くぞフォニス」

その日アロンとフォニスは人知れず故郷と呼べる場所を捨てる。

転移して到着した世界は夜の闇に包まれた街だった。その街の名前は確か鳴海市。ここにフェイトがいるはず。

アロンはとりあえず魔力の感じられる方へと移動しようとする、そこで強力な魔力の波動を感じた。次元震を起こすのではないかと思われるぐらいの規模の力の奔流。間違いない、フェイトはこつちだ。

二人は全速力でその方向へと飛び立つ。その顔にはアロンには珍しい焦りの色が写っていた。

なのはとフェイトが同時にジュエルシードに接触したことによりジュエルシードの力の暴走が始まる。それを見てなのはユーノに言われるがままにその場から下がるが、フェイトはそうはしなかった。危険と分かっているのにも関わらずジュエルシードに近づき、そしてそれを掴んだ。包んだ掌に焼けるような痛みが走る。しかしフェイトはその手を離そうとはしない。

母さんのためなら……………私は……………。

「フェイト!!」

ふいに呼ばれた名前にフェイトは顔を上げると、そこには自分が兄と慕っている男の子がこちらに全速力で向かっていた。フェイトの前まで飛んできたアロンはフェイトの手を無理矢理引きはがす。

「兄さん!? ダメだよ! これは私の……………」

「うるせえ! 黙ってる!!」

フェイトを一喝して今度はアロンがジュエルシールドを掴みこんだ。アロンは漏れそうになる悲鳴をかみ殺すとさらに手に力を入れる。暴走しかかっているこの巨大な力を無理矢理押さえ込む。そのためにアロンは自分の全ての魔力を掌に注ぎ込んだ。

「え? ええ!?! ……だ、誰?」

突然現れてフェイトを助けた少年。思わぬ人物の登場になのは困惑しながらも溢れる光から目を反らすことはなかった。やがて収まってゆく光にアロンは最後の一撃と言わんばかりに全力で魔力を注ぎ込む。

そして完全に光りを失ったジュエルシールドにはシリアル番号が刻まれており、それをアロンは息を切らしながらフェイトへと渡した。

「ほら、早く」

「う、うん。……………封印」

フェイトのデバイスであるバルディッシュにジュエルシードが吸収されてゆくを見守るとアロンは大きく息を吐きながら「危なかった……………」と呟いた。

「あ、あの……………」

「ん？君は誰だ？」

一応解決したようなのでなのは意を決して目の前に立つ少年に声をかける。少年はフェイトを助けたことから自分の敵であることは分かったが、どうも敵とは思えない言葉遣いで返事をする。

なのははそれに毒気を抜かれながらも「大丈夫ですか？」とだけ尋ねた。

「ああこれ？回復魔法でもかけときや治るよ。ありがとね、心配してくれて」

「あつ、いえ！……………あの、その……………お兄さんはフェイトちゃんの仲

間なんですか？」

「そうだよ。でも俺はジュエルシードには興味はないんだ」

「そ、それは危険な物なんです！だからこちらに渡してください！」

それを聞いたアロンは目を丸くしてなのはの方をジッと見つめている。やはり年上の少年に見下ろされるのはなのも怖いのか、たじろぎながらもなのはフェイトとアロンの顔を交互に見ている。そんな様子を見てアロンはふと一つの想いが浮かぶ。これを実現できたならどんなに幸せだろう。

「フェイト……先に帰ってろ」

「でも……………！」

「いいから。フォニス、フェイトを連れてってくれ、そして治療を頼む」

「了解しました。では」

フォニスはフェイトの肩に手を置くとそのまま転移してその場を去

った。そして残されたのはとアロン。

「気をつけてなのは！その人、かなり強いよ！」

地面の方に目を向けるとそこには喋るフェレットがいる。おそらくこのなのはとか言う子の使い魔なのだろうと思いつつもなのはに話しかける。

「なのはちゃん。君はフェイトのことをどう思ってる？」

「え？どうって……………」

「憎い敵かい？殺したい相手かい？……怒りはしないよ。それに何もしない」

アロンは信用してもらうために武器をしまうと今度はバリアジャケットまで解いた。なのはとしては始めから攻撃されるなんて考えていなかったなので突然の行動に驚いたが、この人が自分の気持ちを正直に答えて欲しいということは分かった。

「フェイトちゃん……どこか悲しそうですね。だから私はフェイトちゃんを助けたい。私が魔法と出会ったのはつい最近だけど、この力は人を助けるための物だと思うから」

そう言って笑みを浮かべるのはの言葉に嘘偽りはない。そう確信したアロンは今一度なのはと面と向き合い、そして深々と頭を下げた。

「お願いだ……あの子と……フェイトを救ってやってくれないか？」

「救う………？」

「あいつは心に深い闇を背負っている。それを消せるのは俺じゃないんだ。俺じゃダメなんだ。……だから頼む、フェイトの友達になつて、フェイトを救ってやってくれ」

突然すぎる要求、身勝手なお願いだということは分かっている。それを重々承知の上でアロンはなのはに頭を下げた。多分理解されないであろう。断られるであろう。そう思いながら顔を上げた先にいた少女は綺麗な笑みを浮かべていた。

「私も、フェイトちゃんとお友達になりたいです」

たった一言、その一言に救われた気がした。フェイトの手を取ってくれる人間がいる。フェイトを愛してくれる人間がこの世界にはい



る。それだけでアロンはこの上なく幸せを感じていた。  
このままなのはフェイトの前に連れて行きたいが、そんなことをしてもフェイトは納得してはくれないだろう。齒がゆいがここは当人達に任せる他ない。

「ありがとう……これからもあの子と対立することがあるかもしれない。けど……それでもあの子と友達になってあげて欲しい。……それじゃあ行くよ。気をつけて帰るんだよ」

そう言い残したアロンはフォニスと同じように転移をしてその場を去った。

「気をつけて帰るんだよ………つか。悪い人の言う言葉ではないよね」

空に向かってそう呟くなのはの目には小さな炎が灯っていた。それは想い。そして誓い。

フェイトがなぜあんな目をしているのか知りたかった。彼女のことを知りたかった。彼女ともっと近づきたかった。そんな自分の小さな願いに対して期待してくれる人がいる。自分に希望を託した人がいる。

それによってなのはの中で覚悟が決まったのだ。フェイトを救うと。

なのはに自分の願いを全てさらけ出したアロンはその後フェイトがいるマンションへと向かう。部屋に入るとフェイトはベッドに寝ており、すでに寝息を立てていた。

その横で静かに回復呪文をかけていたフォニスの横にアロンは座ると何も言わずにフェイトに回復呪文をかけ始める。

「……………」

無言の二人はフェイトの寝顔を見ながらどこか悲しい顔をしている。安らかに眠るその表情はまるで天使のようだと思ってもおかしくない。しかし二人にとってその無垢な表情が心に痛かったのだ。二人は回復呪文を止めるとリビングへと移動する。そこにはうつむいたままソファに座るアルフの姿があった。

「フェイトの容態は!？」

「手にちよつと怪我してただけだ。すぐ治した。後は疲れがたまつてたんだろっな、今はよく寝てる」

「はぁ……よかった」

安堵のため息をつくアルフだが、そうも良かったとは言ってられない

い。今回のジュエルシードの暴走。小規模とはいえ次元震レベルの魔力を放ったのだ。多分これは管理局の人間達にすでに気付かれているだろう。そしてこちらに今向かっている。

「フォニス、フェイトを頼む。あいつほっとくとこのまま倒れるまで動き続けるからな。お前が見張っててくれ」

「主はどこかに行くんですか？」

「ああ、ちよつと管理局の奴らとお話しにな」

それだけを言い残すとアロンはフォニスに有無を言わせる前にどこか別の世界へと転移していった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9278/>

---

魔法少女リリカルなのは PT事件の裏側

2010年10月15日01時35分発行